

5) チョウセンアサガオ(エンジェル・トランペット)=朝鮮朝顔

チョウセンアサガオはナス科の多年草で、熱帯地方では低木状となるものの、温帯地方では1年草として扱われ、冬には枯れてしまう。原産地は熱帯アジアで、茎は高さ1~1.5mほどになってよく分枝し、葉は広卵形で長い柄を持ち、葉縁は波状する。夏から秋にかけて長さが10~15cm、径10cmほどの大型でロート状の白い花を葉腋に一つ付ける。花卉の先は5裂し、漿果には多数の刺があり、まるで水雷のような形をしている。このためアイヌはイカリポポと呼んでおり、これは針千本という意味で、果実の形状に由来する。和名の起りは花が朝顔に似ているためで、なぜ朝鮮がつくのか、その理由は定かではない。『外国』という意味を、軽く『朝鮮』というケースは他にも見られるところから、本種の場合も同様と思われる。別称としてはマンダラゲ、イガナスビ、チョウセンナスビ、ゲカタオシの他、キチガイナスビ、キチガイグサなど『キチガイ』とつくものが多い。その理由は全草にアルカロイドの『スコポラミン』という物質を含み、特に葉と種子は鎮痛、鎮咳、鎮けいの効果があり、胃痛や喘息の薬として用いられてきた。しかし分量を誤ると発狂状態となり、その状態が数日間も続くところから、このような別称が生まれたものである。また『ナスビ』と付くのは草の姿がナスに似ているためである。学名は『*Datura metel*』で、属名はヒンドゥー語「dhatura」の変化したもの、種小辞はアラビア語で小麦とライ麦を混ぜた飼料のことである。このためイギリスでも「Hindu datula」で、ダツラはこの属すべてをさして呼ぶことも多い。中国では「曼陀羅草」「洋金花」である。

チョウセンアサガオが日本に伝来したのは、江戸時代のことで薬草としてであった。当初は盛んに栽培されたこともあったようだが、栽培効率があまり良くなかったせいか、やがて廃れてしまった。しかし当時、華岡青洲はこのアルカロイドを麻酔薬として利用し、日本で始めて乳がんと思われる外科手術を行なったことで知られている。ゲカタオシという別称もこれと無関係ではあるまい。

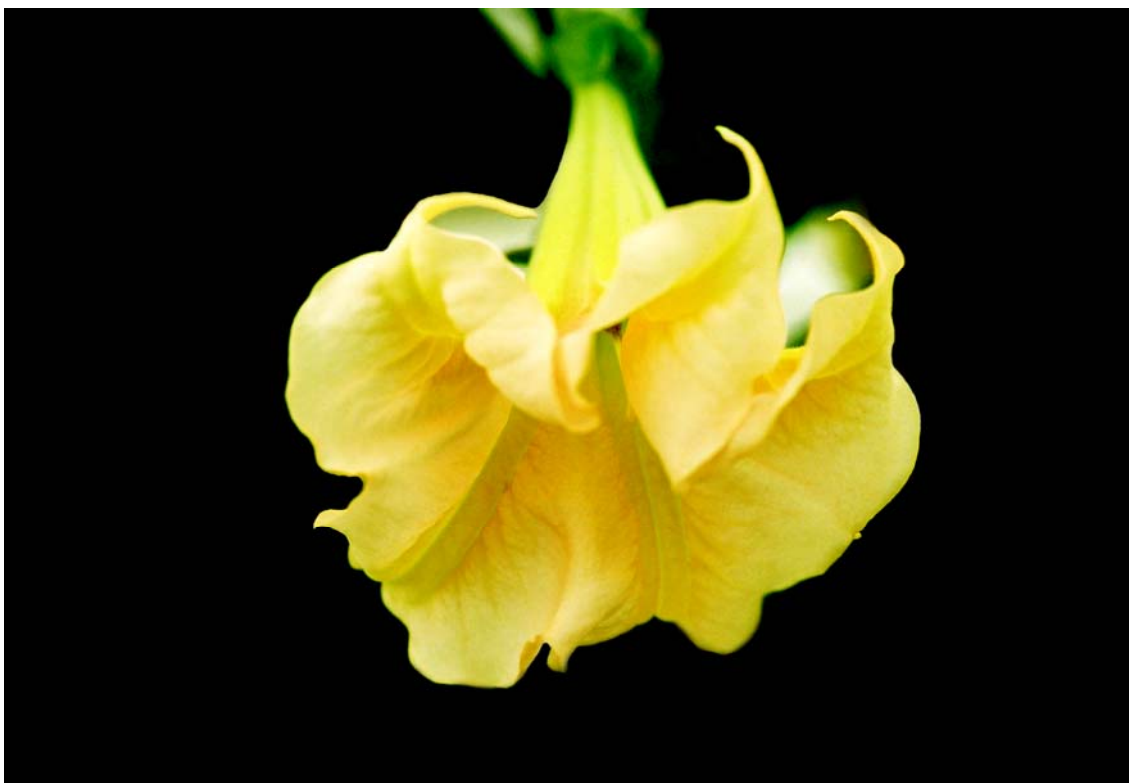
チョウセンアサガオにはいくつかの近縁種があり、どれも大型でロート状の美しい花を咲かせる。淡紫や黄色の花を2~3段重なったような花を咲かせる八重咲種。熱帯アメリカが原産で、明治の初めごろ日本に伝来した洋種チョウセンアサガオ。さらに最近では園芸種でエンジェルズ・トランペットと呼ばれる品種は特に人気が高い。この種の葉は明るい緑色で、葉縁はわずかに波状する。花には長い花柄があり、葉腋より1個ずつ下垂して付ける。花色は白、ピンク、黄色の3種類で、芳香の強いものもある。また黄色とピンクの花は、咲き初めは淡く白に近いが、咲いてから数日経つと次第に濃度が増してくるので、時には濃淡2種類の花が咲いているように見える。東京付近ではかろうじて越冬して低木化し、10月ごろに数百もの花をつけることもある。中には葉の縁に白い斑の入る品種もあって、いかにも多彩である。どの色の種も春先、挿し木で簡単に殖やすことができる。



エンジェルス・トランペットの桃色花種。冬はやや寒がる(さいたま市浦和区)。



エンジェルズ・トランペットの白花種。こちらも同様に関東あたりでは屋外での越冬が不可能ではないが、寒さにあると枯れてしまうことも多い(埼玉県深谷市)。



エンジェルズ・トランペットの黄花種、3種の中では寒さに強い(東京都小平市薬用植物園)。



満開になったエンジェルズ・トランペットの黄花種。これは屋外で越冬して大きな株に育ったものである。しかし例年より寒かったりすると枯れることもある(埼玉県深谷市)。



八重咲のチョウセンアサガオ(東京都小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)